

ヴァーチャル世界と主観(2)

—初期ドイツ観念論期の同一性に関する議論について—

中島 聰・村下 邦昭*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*岡山理科大学非常勤講師

(2007年9月25日受付、2007年11月2日受理)

1 本論の目的

私は拙稿「ヴァーチャル世界と主観」¹⁾において、主観が現実世界とヴァーチャル世界とに分裂しつつも、それらの区別が非常に曖昧になり、主観は地続きになっているそれら両世界に存在していると論じた。しかし、このことに経験的に問題が生じる。それは、上掲の拙論でも取り上げたが、モニタ内の「私」とモニタ前の「私」との区別と同一性の問題である。そして、このモニタ内の「私」はモニタ外の「私」の延長線上にあるが、どこで「内外」の線引きがなされ、それが可能であるのか。

この問題は、さらに次のように言いうるだろう。コンピュータのモニタ内外の「私」は通常、ヴァーチャル世界の「私」と現実世界の「私」という形式で区別されると思われるが、その区別自体が問題である。言い換えれば、「モニタを見ている私はモニタ内で動いている私と同一である」かどうか、ということが問題である。電子メールやBBS(掲示板)、ブログなどヴァーチャル世界における自己表現と、「現実的」な自己表現との間に大きな差異がみられるということは、近年よく指摘されることである。

本論では、このような自己表現の差異を、自己同一性の問題と捉える。つまり、単に自我の二面性という問題ではなく、「何故、モニタ内の私はモニタ外の私と同一視されるのか」という問題として捉える。二つの自我は対置され、モニタ外の私はモニタ内の私を対象化(客観化)する。しかし、このように「私」が「私」を捉える可能性について、本当に「私」の主客分裂がありうるのか、ということ进行う。

この問題に対して、初期ドイツ観念論期²⁾の主観と客観との同一性についての議論を利用する。この議論に関して、論者は他所でこれまで論じてきた³⁾。本論では、それらを踏まえ、主観を中心としながら主客分裂あるいは両者の同一性について、どのように捉えることができるのかを論じる。

2 フィヒテの同一性の形式

まず、ドイツ観念論の最初の一人であるフィヒテの初期知識学における同一性(同一律)について概観する⁴⁾。この同一性の問題は、知識学の三原則に深く関わり、自我論の重要な論証となる。同一性の一般的な形式は $A=A$ と表すことができる($A=B$ とも表せるが、これについては後述する)。この $A=A$ は、知識学では第一原則の発見の手がかりとして論じられているが、

フィヒテの主著『全知識学の基礎』(1794:以下『基礎』と略す)において、知識学の第一原則(根本命題: Grundsatz)は「自我は根源的に端的に自己自身の存在を定立する」であり(GWL I.2.261)、この定立活動を行うのは絶対我である。つまり、自我は自己を定立するものであり、同時に自己によって定立されるものであって、自我以外の何ものにも基礎づけられないという事行(Tathandlung)の構造を持つ。フィヒテはこの第一原則を「端的で無制約な原則」とし、それ故「証明も規定[限定]もされえない」と述べる(GWL I.2.255)。証明されないこの原則を発見するために、フィヒテは $A=A$ という命題の分析を行う。 $A=A$ という論理的命題は、 A が存在することを示すのではなく、「もし A が在るならば、その場合 A は在る」ということを示す、と『基礎』で述べられる(GWL I.2.256f.)。つまり、 A が何であれ、その内容は問題とならず、 $A=A$ という形式が問題とされる(GWL I.2.257)。この形式は〈もし〉と〈その場合〉との間に必然的な連関がなければ

成立しない。この必然的連関は「端的に、一切の根拠なしに」定立される、とフィヒテは述べる (GWL I.2.257)。

この必然的連関は $A=A$ を判断する主体、即ち自我によって定立される。なぜならば、 $A=A$ が客観的事実として存在しても、それを判断する主体がなければ、意味のない命題になるからである。また、もし A が存在すると自我が判断するならば（自我の内に定立するならば）、その場合 A は自我の内に存在する、ということによって、 A が存在することも確保される。

そして、この $A=A$ を判断する自我は、自己自身を捉えるとき、自我は自我である（自我＝自我）と表される。自我＝自我を $A=A$ のように、〈もし自我が存在するならば、その場合自我は存在する〉と読み変えても、結局は、それはそのように判断する自我の内に定立され、自我＝自我は確定される。つまり、自我は自我によって定立され、自我は自我である、という主語－述語関係が成立する。そして、自我の存在、〈自我は在る〉という表現が可能になる。このようにして、〈自我は自我である〉は、〈自我は在る〉と同義になる。 A は A である ($A=A$) は、 A は在る、ということを示さなかったことと対比的である。

この〈自我は在る〉は「経験的意識の事実一切の説明根拠」である (GWL I.2.258)。これにより、自我以外の存在は自我に対して、あるいは自我から説明されることになる。また、〈自我は在る〉と〈自我は自我である〉は同義であり、この時、自我は自己を定立している。この自我の自己定立が上述の事行と呼ばれる。

さて、「 A を定立した自我が、その内で A が定立される自我に等しいので、 A は A である」(I.2.261)。 A は自我によって定立され、 A として限定されている。自我もまた同じである。フィヒテはこの限定活動を次のように述べる。

「限定されたもの、つまり、存在するもの一切は、それが自我の内に定立されるその限りにおいてのみ存在し、そして、自我の外には何も存在しない。上述の命題において、いかなる可能的な A も（いかなる物 [Ding] も）自我の内に定立されたもの以外の何ものでもない」(ibid.)

$A=A$ という同一性・同一律の形式は、自我＝自我、〈自我は在る〉という命題において存在の形式が抽象されて取り出されたものである (ibid.)。論理的規則の形式は、それを使用し、判断する主体によって初めて確保される。

さらに、『基礎』に先行する『知識学の概念』(1794) では次のように述べられている。

「 A が存在するならば、 A は存在する、と論理学は言う。知識学は、 A （この特定の $A=$ 自我）が存在するが故に、 A は存在する、と言う」(BWL I.2.140 校訂注)⁵⁾

$A=A$ はあくまで知識学の原理において、確実性を持つ。このような強い原理を持つ自我論に対して、あるいは、同一性・同一律に対して、当時から様々な反応が見られた。次節では、 $A=A$ の議論を、フィヒテに対するシェリングの反応を中心に考察する。

3 $A=A$ の形式に関するシェリングの議論

知識学に対する解釈の最初のもの一つに、シェリングの『哲学一般の形式の可能性について』(1794: 以下、『可能性』と略す) がある。『可能性』は『知識学の概念』で提示された三原則の概略に基づいて、その三原則の解釈を行っている。

シェリングは知識学の第一原則が最高の原則であることを認めつつ、フィヒテとは異なる解釈を行う。たとえば、〈自我は自我である〉について『可能性』において次のように述べられている。

「自我は端的に定立されており、その定立されていることは自己以外の何ものによっても限定されず、自我は自己自身を（絶対的因果性によって）定立する。（中略）
自我は単に自我として与えられている。したがって、根本命題〔原則〕は、ただ『自我は自我である』という命題のみで可能である（『自我』は根本命題〔原則〕の内容であり、『自我は自我である』は質料的・定式的形式であり、一方は交互的に他方を導出する）」(FP I.57)

シェリングは〈自我は自我である〉という命題の内容と形式に、フィヒテとは異なる意味づけをする。フ

フィヒテは、第一原則は内容・形式共に無制約とし、論理的な「形式」[Form]だけでなく、自我は端的に自己に等しいという「内容」[Gehalt]においても妥当する命題である(GWL I.2.258)、と述べる。そして、「論理学は全ての可能な学に単にただ形式のみを与えるが、知識学は形式だけではなく、内容も与える」(BWL I.2.137)。フィヒテは第一原則の形式を前節で見たように、 $A=A$ として表されるとしているが、内容については、たとえばAは自我によって定立されるとする。

自我=自我が成立しなければ、 $A=A$ も成立しない(FP I.58 Anm.)、という点ではシェリングはフィヒテと同じと言える。しかし、シェリングはAが内容なのではなく、自我が内容であるとしている。また、シェリングは、この $A=A$ という形式が「絶対的に定立されたものの形式」であるとする(FP I.57)。シェリングはさらに、もし、最高原則の内容と形式が自我によって与えられていないならば、つまり、非我(Nicht-Ich)によって与えられるならば、 $A=A$ は可能ではなく、 $A=非A$ が存在する、と述べる(ibid.)。

非我は、知識学では第二原則で述べられ、 $\langle Aは非Aではない \rangle$ という命題から、 $\langle 自我に対して端的に非我が反立される \rangle$ という命題が発見される。この時、自我は非我を定立するのではない。そして、この第二原則は、「形式に関しては端的に無制約であるが、質料に関しては制約されている」(GWL I.2.266f)。

この点は、シェリングも同様の立場を取りつつ、やはりフィヒテとは異なる解釈が行われる。

「非我が自我に反立され、自我の形式が無制約性である場合、非我の形式は被制約性である。そして、非我が自我によって制約されている限りにおいてのみ、非我は根本命題〔原則〕の内容になる。最高の根本命題〔原則〕によって無制約性の形式が基礎づけられるのと同様に、第二の根本命題〔原則〕によって被制約性の形式が基礎づけられる」(FP I.58)

そして、シェリングは自我によって非我が定立されるとも述べる(FP I.59)。ここで、非我の扱いがフィヒテとシェリングで異なってくる。確かに、非我が定立されていることによって、フィヒテと同様、内容(質料)が制約されている。しかし、非我は被制約性の形式とともに、最高原則の内容が非我である、とも解釈される。最高原則の内容は自我であり、同時に非我である。

『可能性』は、自我の中に二つの自我、つまり、A(自我)を定立する自我と、非A(非我)を定立する自我があることを述べる(FP I.58)。そして、この二つの自我を総合する第三の根本命題(原則)が述べられる。フィヒテの第三原則は、相容れない自我と非我を自我において量的に総合する原則であり、この点、アプローチが異なってくる。非Aの問題は $A=B$ の問題であるに関わってくるので、今はこれ以上論及しない。

議論を $A=A$ に戻す。

$A=A$ が絶対的に定立されたものの形式である、というのは、フィヒテの第一原則の形式である $A=A$ とは異なる。知識学では $A=A$ は $\langle 自我は自我である \rangle$ の存在形式であった。しかし、シェリングは、 $\langle 絶対的に定立されたもの \rangle$ という規定を行う。これは $A=A$ に非我の議論が組み込まれた結果であろう。というのも、自我ではなく、非我によって形式が与えられるならば、 $A=非A$ が可能となる、とされているからである。非我が与える形式は被制約性の形式である。そして、シェリングは、Aが自我であったことから、 $A=非A$ を自我=非我と、置き換える(ibid.)。シェリングはこれでもって第二の根本命題〔原則〕を導出する。つまり、非我が自我によって定立される、ということが $A=A$ の $\langle 絶対的に定立されたもの \rangle$ という規定から導出されるのである。

ところで、シェリングは同じ『可能性』の中で、 $A=A$ を絶対者として述べている(FP I.52 Anm.)。絶対者は自己自身を定立するので、絶対的に定立されたものでもある。しかし、シェリングの議論を追うと、絶対者の中に絶対者ではないものがありうることになる。というのも第二の根本命題が成立するためには、同一の自我(絶対者)から、 $A=A$ から $A=非A$ への内部的な移行が生じるからである。

この自我(絶対我)内部におけるAと非Aの共存可能性について、シェリングは『哲学原理としての自我について』(1795: 以下『自我論』と略す)において、知識学の第二原則に従って、次のように述べている。

「Aが自我の内に定立されているので、非Aは必然的に自我の外に、自我から独立に、非存在の形式において定立されている」(IP I.146)

但し、 $A=非A$ の議論が捨てられたわけではない。『可能性』において述べられた難点を、次のように明確

化し、難点を回避する。

「もし自我が根源的に一切のものを……自己と同一的に定立し、また最も純粋な同一性として自己自身を定立しないのであれば、 $A = \text{非}A$ が定立されるだろう、ということも可能になるだろう (wäre möglich)」(IP I.141)

知識学の第一原則に従えば、自我が自己に同一的でないことはありえない。したがって、第一原則にしたがえば、 $A = \text{非}A$ は想定可能以上のものではない。

だが、たとえ第一原則が経験的意識の事実根拠であるにせよ、自我に対しては非我(自我ではないもの)が存在する。それは自我の外部にもあるが、自我の内部にも存在する。 $A = A$ から $A = \text{非}A$ への内部的な移行が存在する。それはシェリングが論述したように、知識学の第一原則から第二原則への移行ではなく、第一原則から第三原則への移行においてなされる。 $A = A$ を保ったまま、つまり、自我の純粋な自己同一性である(自我は自我である)を保ったまま、 $A = \text{非}A$ へ、(自我は非我である)への移行が可能である。

これが $A = A$ から $A = B$ への移行、あるいは絶対我(無限我)から有限我への移行である。次節以降では $A = B$ を中心とした議論を行い、その後、 $A = A$ と $A = B$ との関係を現実的な場面において考察することにする。

4 $A = \text{非}A$ あるいは $A = B$ の形式に関する諸議論(1)

まずフィヒテの『基礎』における $A = A$ と $A = B$ の関係について概観しておく。

「 $A = A$ という命題において、第一のAは、自我のように端的に定立されたものか、あるいは各々の限定された非我のようにある根拠から定立されたものである。この場合、自我は絶対的主観として働いている。そして、ここから最初のAは主語と呼ばれる。自我が自己自身を最初に自己の中で定立したが故に、自己自身を反省の対象〔客観〕と成す自我が自己の中で定立されたとして見出すことが、第二のAによって示される。判断する自我は或ることを、本来Aに関してではなく、自己自身に関して、即ち、自我が自己の内にAを見出すということに関して述語づける。それ故、第二のAは述語なのである。——したがって、 $A = B$ という命題において、Aは今や定立されたものを示し、Bは定立されたものとして既に見出されたものを示す。——『在る』[Ist]は定立作用から、定立されたものの反省へという自我の移行を表している」(GWL I/2.259 Anm.)

つまり、 $A \text{ ist } A$ ($A = A$)であれ、 $A \text{ ist } B$ ($A = B$)であれ、述語の位置にあるものは、定立されたものとして、「在る：Ist」として規定されている。しかも、それは単に定立されたものではなく、定立されたとして見出された(反省的に捉えられた)ものである。二重の規定の下に述語は存在している。それは『在る』という活動及び存在様式を通じて述べられる。

これに対し、 $A = B$ という判断に関してシェリングは次のように述べている。

$A = B$ という判断は「時間や空間のあれこれの或る点における、あれこれのAではなく、AがAである限りによって、AがAであり、したがってAが自己自身に等しくなる規定によって、AそのものとしてのAがBに等しい」ということである(IP I.143)。

Aが自己自身に等しいということによって、 $A = B$ という判断が成立する。それは時間・空間という制約を抜きにして可能である。なぜならば、それは自我の定立作用によって、実在性ととも規定されているからである。

「自我が自我の内にAを定立するので、自我は何か或る実在性に等しく、Bに等しいAを定立するが、しかし、Aを自己自身に等しい或るものとして、すなわち、Bか非B=Cのいずれかとして必然的に定立する」(IP I.142)

先に $A=A$ という同一律が成立していることを前提として、 $A=B$ が成立している。自我の内に立てられた A に、別に定立された B も等しい、ということだろう。フィヒテの表現を借りれば、既に定立されて見出されている B が在り、それが自我の内に定立されている A に等しいとして、 $A=B$ ということが成り立つ、ということになるだろう。

この形式的議論を具体的な認識の場面でこれを解釈すると次のようになるだろう。認識主体（私）が机の上の一冊の辞書を捉えたとする。私は「本」（ A ）という認識を規定し、「机の上の辞書」（ B ）を「本」として捉える。私が「本」を定立しているので、「本」が「本」であるという規定によって、「本」は「机の上の辞書」に等しい。「本」＝「机の上の辞書」となる。しかし、また同時に、「本」という規定は「机の上の辞書」だけではなく、「机の上の辞書ではない辞書」（非 B ）である「書棚にある辞書」（ C ）にも及ぶ。机の上には無い辞書は書棚にある、という二者択一的な把握になる。無論、これは床に落ちている辞書（ D ）、紛失した辞書（ E ）などのように項目を増やすことは可能である。また、辞書以外でも文庫本や洋書などのように「本」と判断されるものにも、この規定は拡大できる。したがって、最終的に「本である」と自我の内に定立された判断にしたがって規定される。

これが自我自身に対して行われるとどのようになるのか。自我は自己を自我として定立しているのだから、自我は自己を自我として捉える。この時、定立する自我と定立された自我は同一であるが、この同一性に比較的早く疑義をはさんだのが、ヘルダーリンやノヴァーリスである。ヘルダーリンは次のように述べている。

「私が、自我は自我であると言う場合には、主観（自我）と客観（自我）は合一されていないので、分裂されるべきものの本質に反することなしには、いかなる分裂も生じえないのである。逆に、自我は、自我の自我からの分裂によってのみ可能である。いかにして、私は自己意識なしに、私！とすることができるのか？ そして、いかにして自己意識は可能であるのか？ 私が私に反立されていることによって、私自身から私を分裂することによって、しかし、この分裂にも拘らず、この反立において私を同じ私として認識することによって。……同一性は決して、端的に生じるかもしれないであろう客観と主観との合一ではない。それ故、同一性は絶対的存在に等しくない」⁶⁾

「私は私である」と述べられる時、主語の「私」と述語の「私」とは異なる、という主張は、フィヒテの『基礎』から導出できることである。つまり、先に引用した $A=A$ から $A=B$ への移行と、 A と B との違いが、そのまま「私は私である」に適用されるのである。ヘルダーリンは「私は私である」という自己意識において、同一性は絶対的存在に等しくない、と述べる⁷⁾。しかし、ここでは、 $A=A$ という同一性ではなく、 $A=B$ という同一性が絶対的ではない、と読むべきであろう。なぜならば、主観（ A ）と客観（ B ）の合一による同一性が問題にされているのであって、 $A=A$ 自体が問題になっているのではない。そして、 $A=A$ が絶対的存在に等しく無いならば、同一性の保証が無くなるであろう。シェリングが $A=A$ を絶対者と呼んだのも、そこに主客分裂を見ていないからであろう。

5 $A=非A$ あるいは $A=B$ の形式に関する諸議論（2）

さて、 $A=A$ は単なる同一性ではなく、同一律である。フィヒテはこの違いを明確にしてはいない。これに対して、ノヴァーリスはこの二つを区別するが、同一律よりも同一性を詳細に考察している⁸⁾。これは、フィヒテが $A=A$ を Wenn-So 構造（「もし～ならば、その場合……」の構造）として論じたことに対する反応であると言える。ノヴァーリスは同一性について次のように論じている。

「同一性の本質はただ**仮象の命題**においてのみ措定されうる。我々は同一的なものを表すために、同一的なものを捨て去る。——このことが仮象的にのみ生じ……『存在すること』[Ist] が**生じる**。もしくは、我々はそれを、非存在を通じて、非同一的なものを通じて表象する」(FS Fr.1)

ノヴァーリスは $a=a$ という記号によって同一性を表すが、この a は A から区別され、 A に対する反省によって定立されたもの、つまり、既に限定されたものとして扱われる。同一性の本質が仮象の命題であると言われるのは、この a が本質的ではなく、限定された存在だからである。本質的な A は自我が a を想定することで、自我によって想定されたものである。 a は A から分割されている (FS Fr.1)。 A は現前せず、 a とは

非同一であるので、 $a = a$ は、Aの想定と「論理的なコプラ」(FS Fr.553)としてのIst(「である」「存在すること」)によって、「単一なもの述語化」(ibid.)を通じて立てられた同一性である。Aはフィヒテの絶対我のように自己を対象化せず、したがって自己と同一であるということも端的には言えないものであると考えられる。というのも、Aも絶対我もそれ自身、「Aは在る」や「自我は在る」と表現され、そして、 $a = a$ の保証をする根拠となるものだからである。

ところで、シェリングは『可能性』において、第一原則が「端的に無制約な形式」であり、「無制約性の形式(矛盾律、分析的形式)」であると述べている(FPI.64)。まず、分析的形式であるので、 $A = A$ ではなく、 $A = B$ という形式が採られる。だが、この $A = B$ のBは非Aであってはならない。なぜならば、もしBが非Aであるならば、 $A = \text{非}A$ という矛盾につながるからである。したがって、 $A = B$ は矛盾律に反しない⁹⁾、矛盾律を「厳守」する形式として、「矛盾律」と呼ばれる¹⁰⁾。前述したように $A = \text{非}A$ の可能性が、シェリングの論考には含まれている以上、それを確実に防ぐ無制約な形式($A = A$)が必要なのである。そして、 $A = \text{非}A$ は第一原則にあっては想定可能以上のものではなかった。フィヒテは矛盾律について、「(一切の分析を基礎づける矛盾の論理命題) 反立の論理命題」と『知識学の概念』において論じている(BWL I.2.148)。つまり、矛盾律は第一原則ではなく、第一原則から独立な第二原則から論じられるものであり、 $A = A$ ではなく、「Aは非Aではない」から述べられるものである。シェリングは、反立に関して、「非我は自我ではない」という表現で述べている(FPI.58)。

さて、ノヴァーリスは $a = a$ について考察する中で、彼もまたこれを矛盾律と呼んでいる。

「同一律は真理の命題である——実在性。矛盾律は——仮象の命題である——否定性。……
同一律は仮象と真理にとって特性である。矛盾律は両者の関係を相互に表現する」(FS Fr.234)

ノヴァーリスにおいて、同一性の本質は仮象の命題であった。その仮象の命題が矛盾律と同一視されている。矛盾律は仮象と真理との関係を表す。また同時に、矛盾律を同一律の実在性に対応して考えると、矛盾律は否定性であり、非実在性(非存在)と考えることができるだろう。ヘルダーリンが同一性を絶対的存在と等しくないとみなしたことは、ノヴァーリスが同一性を否定性とみなしたことに類似するだろう。

しかし、ノヴァーリスは仮象を単に否定的に取り扱うのではない。仮象は実在性にとって必要不可欠なものとされる。

「実在性はただ関係、形式、仮象——否定性によってのみ実在性を認識する。存在の形式は非存在である。非存在の形式は存在である。非存在の関係は存在である。結局、真理は実存在〔Existenz〕——仮象の形式、非存在の形式である。そして、仮象は実存在の形式である」(ibid.)

実在性、ここでは「存在」と言うためには、「非存在」ということが対置されていなければならない。「存在」の内容(質料)は「存在」ことそのものに含まれているが、その形式は「非存在」ということから区別され決定される。「非存在」も同様に「存在」から区別される。このことを自我に当てはめると、自我が在るから非我が在り、非我が在るから自我が在る、ということになるだろう。ノヴァーリスはこう述べている。「自我はただ非我を通じてのみ考えられうる。自我は、非我が存在する限り、自我であるにすぎない」(FS Fr.562)。このような自我と非我の関係は、フィヒテ知識学に対する一つの批判点である。しかし、そもそもフィヒテは非我をAに対する非Aから見出したのである。非我が存在するから自我は存在するのではなく、自我が存在するから自我は存在するのである。

ところで、ノヴァーリスは「 $a = a$ 」を「経験的」と述べ、「 $b = a$ 」は「真理の諸形式」と述べる(FS Fr.234)。しかし、真理は上記引用のように仮象と共に実在性に関わる。真理と仮象とを総合的にまとめあげる判断主体に実在性の根拠が求められる(「 $c = a + b$ 」は「総合」であり「実在性」である(ibid.))¹¹⁾。ノヴァーリスが $a = a$ を経験的とみなしたのは、コプラIst「である」が、既に定立されたものを示しているからだろう。ノヴァーリスは、「aはaであるは、aの産出の繰り返しであるとしか私には思えない」と述べている(FS Fr.553)。 $a = a$ は何も新しいものを生み出さない。これに対して、「 $b = a$ 」は新しいものを生み出している。ノヴァーリスはこの「 $b = a$ 」を「反立」と述べている(ibid.)。反立は次のように述べられている。

「反立から対象が、対象から反立が生じてくるということ——自己自身に対する対象の同一性が自己の対立〔Kontrarietät〕から導出されなければならないということ私を洞察する」(FS Fr.284)

ここで重要なことは、自己（a）とは異なるもの（b）が対象として現れるということと、自己対象化における同一性が自己の対立から導出されるということである。この2点を中心に以下の節で論じる。

6 対象の総合に関する議論—類種概念に関する議論—

ノヴァーリスもシェリングも問題にした $A=B$ について、再びここで解釈を試みる。以下で述べるように、フィヒテはAとBは自我の中に定立されており、それらが自我において等しいと述べる。ノヴァーリスは $b=a$ について、aとbとの違いについては詳細に述べない。シェリングは $A=B$ のBは非Aではない、と述べている。

さて、AとBの区別と同一性を、フィヒテは「XにおいてAは非Aに等しい」という表現によって説明する(GWL I.2.272)。Xは自我の活動であるが、このXには二つの働きが含まれている。一つは、等しいものを反立させあう「区別根拠」〔*Unterscheidungs-Grund*〕であり(GWL I.2.269)、よって「反立」である(GWL I.2.274)。もう一つは、反立するものを等しいとする「関係根拠」〔*Beziehungs-Grund*〕であり(GWL I.2.269)、よって「総合」である(GWL I.2.274)。

フィヒテは区別について、『基礎』で次のように述べている。

「概念の区別根拠を表す何か或る概念において反立されたもの一切は高次の（より普遍的な、より包括的な）概念において一致する。この高次の概念は類概念と呼ばれる。即ち、反立されたもの両者が含まれ、しかも両者が等しい限りにおいて含まれている総合が前提されている（例えば、金と銀は等しいものとして金属という概念の内に含まれている。この金属という概念は、その内で両者が反立されているという概念、例えば、ここでは特定の色としての概念を含んでいない）。したがって、関係根拠を含む類概念と、区別根拠を含む種差という定義を論理的規則は決めなければならない」(GWL I.278)

金と銀という「種」あるいは「種差」は、それらの上位概念である金属という「類概念」によって総合される。しかし、最高類は絶対我ではない。様々な種差を総合しても絶対我に辿り着くことはない。なぜならば、絶対我はそのようにして発見されるのではなく、 $A=A$ という同一律を保証する働き（存在）として発見されるからである。この点はシェリングが明確に述べている。

自我は「絶対的な一者」〔*absolute Einheit*〕であるので、「自我は種でも類でも、個〔*Individuum*〕でもない。というのは、種も類も個も、数多性に関連して考えられうるからである」(IP I.108)

区別は数多性とは関係のない単一な自我（絶対我）において判断されるものである。

この区別と総合に関して、シェリングは、経験的な総合（統一）は自我（絶対我）の領域外で行われる、と述べる(IP I.107)。というのも、あらゆる判断・論証はそれ以上論証されない絶対的な根拠に基づいているが、その絶対的な根拠が絶対我だからである(IP I.108)。フィヒテの絶対我も論証されず、発見されるのみである。

では、最高の総合はどこで行われるのか。それは第三原則に基づく有限我においてである。第三原則の一般的形式は、先に述べた「XにおいてAと非Aは等しい」である。これを自我で言いかえると、「絶対我において、有限我と非我とは等しい」となる（実際には、フィヒテ独自の量の概念が使用されるが、ここでは割愛する¹²⁾）。つまり、同一律である $A=A$ も、同一性を示す $A=B$ も、その形式は「自我の純粋な同一性によって制約されているだけである」(IP I.143)。絶対我が持つ純粋な同一性に基づいて、 $A=B$ も同一と判断されるのである。この判断に、数多性という類種概念が同時にあてはめられる。そこで、有限我（経験的自我）は区別根拠と関係根拠でもって、二項以上の概念の関係を判断するのである。

そして、A（金）に、非AあるいはB（銀）という概念が対置させられて、新しい概念が生まれる。そこでは、金と銀の上位概念である金属という類概念が働いているが、この類概念は自我によって判断されてお

り、保証されている。

さらに、「机の上の辞書」と「床に落ちている辞書」の同一性は、類種概念では判断できないが、自我の内における区別根拠と関係根拠において判断できるだろう。つまり、場所は区別され、辞書（本）という関係によって等しいと判断されるだろう。

但し、ノヴァーリスが示した $b = a$ については注意しなければならない。ノヴァーリスは次のように述べている。「主観は客観から生じない、逆も同じである」(FS Fr.595)。ただ「主観と客観は、左と右のように、理念的な諸差異 [idealische Differenzen] にすぎない」(FS Fr.594)。これは、先に引用した、反立によって対象が生じる、と異なる。また、主観に反立された客観、主観の対象としての客観、ということは単純に述べることはできない¹³⁾。さらに、反立と対象を、左と右の関係と並置することはできない。では、何によって主観と客観とが区別されるのだろうか。ノヴァーリスはカント的なカテゴリー表を利用して主観と客観の関係づけ及びそれらの総合を行っている。ただ、その関係づけを裏打ちするものについては、カテゴリーが自我の活動や限定作用に関わっていることは述べるが、それ以上は明確に述べていない。しかし、主観も客観も自我の作用に関わるのであれば、 $b = a$ の a も b も自我ではない。自我から非我は生じない。自我の下でのみ、 a に反立された b が対象化される。それは a と b が入れ替わろうと可能である。左と右が単に理念的にそのように区別されているのと同じく、金と銀も理念的に区別されうる。つまり、金に反立され銀が対象化されようと、その逆であろうと、問題はない。問題は、 $b = a$ にしたがって、「金は銀である」、その逆「銀は金である」とは言えないことである。これを述べるためには、類種概念を導入しなければならない。つまり、「金属という点で、金と銀は等しい」と表す必要がある。これに対し、ノヴァーリスは類概念を表象や感情の働きに関係づける (FS Fr.466, 467)。その働きは自我が担うが、その自我はフィヒテやシェリングのように絶対的な存在ではない。

自我は自己を定立し、自己によって定立されている、という活動によって自我は自己自身に等しい。しかし、ノヴァーリスはフィヒテ的な自我を絶対視しない。ノヴァーリスは次のように述べている。

「自我が自己を自我として定立するという活動は、独立な非我という反立に、またそれらを取り囲む領域への関係に結びつけられていなければならない。この領域は神や自我と呼ばれる」(FS Fr.8)

「自我はただ非我を通じてのみ考えられうる。自我は、非我が存在する限り、自我であるにすぎない」(FS Fr.562)

「他の自我、あるいは非我なしに、自我は自我として定立されうるか」(FS Fr.5)

ノヴァーリスはヘルダーリンが問題にしたように、〈私は私である〉という構造に反立を見出し、自我に非我を結びつける。同一性を保証する自我は、ノヴァーリスにおいてはまた反立され、対象化される。ノヴァーリスはこの自我を、フィヒテが言うところの有限我とみなしている。自我は「類と個の間で限定可能」である (FS Fr.470)。ノヴァーリスは自我より高次の存在として神を置く。それが上記引用において、自我の定立に対する反立が行われる領域を神と呼ぶ。ここで神と自我が並置されているが、この自我はシェリングが絶対者と呼ぶ絶対我であろうが、ノヴァーリスは自己定立する自我とはみなしていない。もし何者かが自己定立するならば、必ず反立を伴う。ノヴァーリスの絶対我も神も自己定立せず、存在する。神は種にならず、最高類でもない (類であれば、種が想定され、内部に反立の可能性を生む)。

本論の目的は神について直接論じることではないため、議論を再び同一性に戻す。

繰り返しになるが、類種概念による総合であろうと、区別根拠と関係根拠による連関であろうと、それらは判断主体である自我において行われる。この自我については、フィヒテ、シェリング、ノヴァーリスでは様々な点で相違がある。いずれにせよ、自我に対する反立可能性も残っているが、自我は判断し、表象する主体であることには変わりはない。また、ノヴァーリスが述べているように、反立に対して対象が生じるのであれば、反立されうる自我に対象が生じてくる可能性もまたある。つまり、自己対象化と反立の問題が生じる。したがって、先に先に示した二つの重要点の残りの一つ、自己対象化における同一性が自己の対立から導出されるということが再び問題点として挙がってくる。

6 同一と反立の総合

本論はフィヒテが自身の哲学体系の出発点とした $A = A$ という同一律から論をはじめ、それに対するシェ

リングとノヴァーリスの解釈を考察してきた。ここでは、同一という問題について、それらがどのような意味合いを持つのか、考察する。

フィヒテは $A=A$ の形式と内容を自我が与えると論じる。シェリングは、 $A=A$ の形式は自我が与え、内容は自我であると論じる。ノヴァーリスは $A=A$ の形式と内容については特に述べないが、同一律が実在性を、同一性が形式を与えると解釈しうる。ノヴァーリスでは明確ではないが、 $A=A$ を保証するものは、自我（自我の判断）である。

また、 $A=B$ という同一性について、フィヒテは既に定立されたものへの反省とされ、「存在するもの」として捉えられる。また、 $A=A$ が絶対我であったことに対して、 $A=B$ は有限我であることを示す。つまり、フィヒテの $A=B$ の B に注目するならば、それが対象化された自我として考えられ、したがって、それは有限我とみなされうる。対象化ということでは、ノヴァーリスの $b=a$ が明確である。反立と対象は、 A とは異なる B が同一である、ということによって成立する。自我は金と異なる銀を金属という概念によって同一であると判断する。

しかし、シェリングは $A=B$ について、 B は非 A ではない、と論じる。 B が A ではないが、 A と同一である、と解釈するならば、次のように考えられうる。 A に反立され、対象化された B は、上位の類概念によって A と同一である、とみなされる。このように考えると、最高類であっても、上位概念がなくとも、自我が同一であるとみなせば、 A と B は同一であるとみなされうる。というのは、たとえば、存在と非存在は、自我において、総合されるからである。知識学の第三原則は自我（存在）と非我（非存在）の総合を示している。シェリングは自我の中での存在と非存在との両立可能性を示している。ノヴァーリスは $a=a$ と $b=a$ から存在と否定性を論じ、両者の総合 $c=b+a$ によって実在性を論じる。この総合は自我の判断において行われる。

したがって、 $A=A$ は直接的に、 $A=B$ は間接的に、自我によって論理的な正しさを保証される。そこには自我の判断が働いており、客観的な確証性はないと言える。思い違いであろうと、無理やりな関係付けであろうと、 $A=A$ も $A=B$ も成立する。 A であろうと B であろうと、それらが非存在であっても、それらは自我の存在の内に定立され、 A または B は「存在する」と反省される。非存在であることと全く無関係であるのは、自我だけである。自我は自己を判断する（対象化する）時、既に反省されているが、反省する自我の存在がなければならぬ。したがって、フィヒテは、第一原則を「自我は在る」と表現し、シェリングもこれに倣う。ノヴァーリスは自我の上に神を置く。また、シェリングは、 $A=A$ が絶対者である、と述べる。知識学の第一原則が示す自我、絶対我は当時から神や絶対者とみなされている。

さて、絶対我であれ、神であれ、 $A=A$ あるいは $A=B$ はそれによって保証される。残る問題は、 $A=B$ において、 B が非 A ではない、ということである。 B は A に反立され、上位概念でもって同一とされる。シェリングは、これを自我に当てはめ、自我=非我は非我によって形式が与えられることを示しているとする。つまり、自我ではないものによって、自我は自我ではないものと同一であるとみなされる。しかし、これは絶対的な純粹同一性に基づくものではない。ただ、自我の内に自我ではないものが生じてくる場合、つまり、自我に或るものが反立される場合、反立されたものを中心に見ると、自我は非我（自我ではないもの）と同一である、と自我が判断することはできる。これはフィヒテにおける $A=B$ の議論からも論じうる。

この反立されたものに対する自我（有限我）の活動を、フィヒテは理論的には表象や直観などと呼び、実践的には努力や衝動などと呼ぶ。特に努力は自我でないものを自我とし、理想である絶対我へと向かう活動である。この時、非我は自我の理想として立てられる。この活動に合わせて $A=B$ を、別様に表現するならば、 $A=A'$ と表すことが良いと思われる。なぜならば、理想は自我が自己にしたがって非我の内に定立したものである。理想は新たな自我自身を示している。但し、理想を描く自我も、理想として対象化される自我も、 A' と形式化される自我も全て有限我において存在する。

自我が自己を対象とするならば、その形式は単に $A=A$ である。しかし、自我が自己ではない自我を自己に対して定立するならば、その形式は $A=A'$ と表しうるだろう。 A' は A ではないが、全く非 A （ B ）というわけでもない。この場合、 A' は理想として対象化される自我でなくとも、理想像としての別なもの（たとえば、憧れのスポーツ選手）であってもよい。

8 ヴァーチャル世界と自我のもう一つの像に対する活動～総括に代えて～

自我自身（ A ）ではないが、その自我として対象化される A' と形式化される自我は、たとえば、ヴァーチ

ャル世界における自我であると考えられる。ネット人格という言葉があるが、これはリアル世界の人格とネット上での人格が(大きく)異なる、ということを示す語である。個人的な経験では、私が開設しているサイトにおいて、開設から半年くらいまで、ネット上で性別を偽るようなことは全くしていなかったにも拘らず、私の性別は女性と捉えられていた。このようにA'を自我が直接定立する必要はない。というのは、A=非Aは非我によって形式を与えられる、とシェリングが述べたことに関係するからである。

さらに、自己対象化の例としては、たとえば、近年のヴァーチャル世界の代表例である「セカンド・ライフ」¹⁴⁾が挙げられるだろう。このサイトでは、その世界に登場させるキャラクターを自分自身に似せることができる。セカンド・ライフ内では、空を飛べる状況以外では、視点を自分自身に固定する限り、ユーザーは日常的な視界を持つ。無論、画像がポリゴンであること、画像処理に時間がかかりやすいことなど、現実とは違う点がある。これは視覚的にリアルとは言えないが、しかし、セカンド・ライフ内での会話は、チャットによってリアルタイムに、現実的に行われる。そこで各人は同じものを見るという共通意識が存在する。

これはテキストだけの場合の方がより明確なリアルさを持つてくる。確かに、テキストを読むだけであるので、視覚的には全く日常的な世界はない。しかし、感情面において、リアル世界の自我とヴァーチャル上の自我との境界は不明瞭になっていく。ネット上で何かしらの言論を行っている人物は、実名でなくともよいことが多い。ハンドル・ネームなどの自由な別名(セカンド・ライフでは苗字は選択制なので自由ではないが)を持つことによって、リアル世界の自我とは異なる自我を、リアル世界の自我が作ることができる。さらに、リアル世界で互いに知っているものであれば、リアル世界の人格とネット上での人格との同一性(A=A')は客観的に認められる。

ヴァーチャル上で何ものかに「なりきる」(振りをする)ことは、一種の遊びもあるが、実際に行われていることである。それが実在の人物か、架空の人物かは問題にはしない。ただ、なりきりをなりきりと見抜くように、ネット上の人物が実際に存在するかどうか、というアプローチが行われると、リアル世界で捉えきれなくなる可能性がある。無論、IDの調査などは有効である。しかし、それは「なりきり」を前提としている上で行われる調査である。ネット上の詐欺などは一種の「なりきり」によって行われている。それを詐欺と気づく前に気づけるかどうか。A'からAへのアプローチはこれまでの議論から言えば、難しいと考えられる。なぜならば、A'がA'であること、つまり、Aが存在するかどうか、ということはA'から導き出されていないからである。A'がAと勘違いされる可能性は多分にある。ノヴァーリスはAからaを切り離れた上で、a=aなどを論じている。しかしそこでは、aに対してAは想定され、その想定元でa=aの論理的コブラが確保されている。A'にAを想定すること、あるいはAに対してAのプロトタイプとも呼べるものを想定すること、これらは可能である。しかし、これでは無限に遡及してしまいかねない。ネット上の自我もリアル世界の自我と同じであると想定することも、異なると想定することも両方可能であるが、IDなどの客観的確認がない限り、その想定を確かめることは困難である。リアル世界で互いに知り合っている、ネット上で別名を名乗ったり、他の人物になりきっていたりすれば、互いにネット上ではリアル世界のことを知らないか、一方的にしか相手を知らない、ということが生じる。ネット上に現れる人格がリアル世界と一致するかどうか、判別する手段は認識上、主観的にはないと言える。ただ、A'に対してAを想定することが可能なかである。

リアル世界の自己自身に対するA'については、さらに次のように言うことができる。自己の何かしらの理想を反映させて、リアル世界の自我Aはネット上の自我A'を作ることができる。A'は自分自身をよく見せたい、という虚飾的なものであっても、それはA=A'という同一性を崩さない。問題はA'に大きく行動が傾くときであり、これがネット人格の問題になる。

本論の最後として、もう一つ問題を提示して起きたい。リアル世界の自我Aがネット上の自我A'を作ることができるとして、それはどのようにしてか、ということである。A'は一つの理想像であるかもしれないが、その理想は何に対するものであり、どのように形成されるのか。知識学では、AがA'になろうとする努力とともに、衝動、自己の内部の欠乏から生じる憧憬、それらの感情、という自我の活動が論じられる。そして、特にA'は理想である時、同時に模像(模写:Nachbildung)として自我に対置される(以上、GWL I.2.431ff.特にGWL I.2.436ff.)。ノヴァーリスにおいても、先述したように、感情や表象が類概念に関わる。AからA'への移行はAの内部的な変化だけではなく、外部からの要因によっても行われるだろう。この外部からの要因に対して、感情や表象に関わる。本論で取り上げた初期ドイツ観念論におけるこのような感性的な活動は、

A = A'の同一性をさらに考える点で重要と考えられる。

A = A'としてリアル世界とヴァーチャル世界の両方に同時に存在しうるユーザーという観点は主観的である。これまで論じてきたように、二つの世界における自我の同一性の問題は、同一性として総合する自我の働き、それに伴う自我の活動(努力や感情、表象)として考えられうる。この問題を取り扱う際に、ドイツ観念論の立場は一つの論じ方として有用であると思われる。但し、これが初期ドイツ観念論期に特有であるのかは、1801年前後のドイツ観念論の動き¹⁵⁾と合わせて、今後考える必要があるだろう。(了)

主要テキスト

Fichte, J.G., *J.G.Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.*, Hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Jacob, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1962ff. (ad 1970 Hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky unter Mitwirkung verschiedener Autoren.)

Schelling, F.W.J., *Schellings Werke.*, Hrsg. von Manfred Schröter, C.H.Beck und R.Oldenbourg, 1927-56.

Novalis, *Fichte-Studien.*, in *Novalis Schriften.* Bd.2, Hrsg. von Paul Kluckhorn und Richard Samuel, W. Kohlhammer, Stuttgart, 1965.

---, *Fichte Studies.*, Cambridge Texts in the History of Philosophy, edited by Jane Kneller, Cambridge University Press, Cambridge, 2003.

凡例

原テキスト中の強調は全て一重下線で示した。筆者の強調は二重下線で示した。

フィヒテ、シェリングの著作については以下の略記号を使用した。

BWL = *Ueber den Begriff der Wissenschaftslehre.*, 1794.

GWL = *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.*, 1794-95.

FP = *Ueber die Möglichkeit einer Form der Philosophie.*, 1794.

IP = *Vom Ich als Princip der Philosophie.*, 1795.

ノヴァーリス *Fichte-Studien.* (= FS) からの引用については、Kluckhorn und Samuel 版全集における断片番号を示した。

z.B. FS Fr.1 = *Fichte-Studien. Fragment 1*

フィヒテ、シェリング、ノヴァーリス以外のテキスト・参考文献は註に書誌を示した。

註

1) 拙稿「ヴァーチャル世界と主観」『岡山理科大学紀要』第42号B(岡山理科大学、2006年) pp.1-11

2) 本論で言う「初期」とは、フィヒテ知識学が最初に形成された1794年を中心とした時期を指す。この時期には、フィヒテ、シェリング以外にノヴァーリス、ヘルダーリンなどが、文量の多少はあれど、「同一性」「自我論」について述べており、それらは有機的に結びついている、と私は考える。

3) 以下の拙論を参照されたい。

「フィヒテ『根元哲学についての我が省察』と知識学の第三原則との関係についての一考察」広島大学大学院文学研究科・文学部西洋哲学研究室『シンポジオン』第49号第2分冊(2004年) pp.24-39

「初期知識学における同一性に関する一考察」広島大学大学院文学研究科・文学部西洋哲学研究室『シンポジオン』第50号第2分冊(2005年) pp.38-49

「ノヴァーリス『フィヒテ研究』における同一性」日本フィヒテ協会『フィヒテ研究』第14号(2006年) pp.107-126

4) 議論の詳細は上掲の拙論「初期知識学における同一性に関する一考察」参照のこと。なお、同一性と同一律の違いに関しては、ノヴァーリス以外での詳細は割愛した。

5) 同様のことは、『知識学の概念』の元となる講義録においても述べられている。

6) Hölderlin, Friedrich, 'Seyn und Urtheil.', in *Sämtliche Werke.*, Bd.4, Teil 1, Hrsg. von Friedrich Beißner, W. Kohlhammer, Stuttgart, 1961, S.216f.

7) この点は、後の同一哲学期(1801年頃)のシェリングやヘーゲル(1801年の『差異論文』など)などにおいて、フィヒテ批判の要点の一つとなる。

- 8) 詳細な議論については、前掲の拙稿「ノヴァーリス『フィヒテ研究』における同一性」参照のこと。
- 9) なお、 $A=B$ が矛盾しないことについては、マイモン『新しい論理学の試み』においても述べられている (S.54)。この書物は、初期フィヒテや初期シェリングの著作において時折論及されている。但し、シェリング『可能性』の当該箇所では、マイモンのこの書物には触れられていない。

Maimon, Salomon, *Versuch einer neuen Logik oder Theorie des Denkens. Nebst angehängten Briefen des Philaletes an Aenesidemus.*, Berlin, 1794 (Neudruck, *Neudrucke seltener philosophischer Werke*. Bd.3, Hrsg. von der Kantgesellschaft, Reuther & Reichard, Berlin, 1912).

- 10) この矛盾律の解釈は、近藤良樹『弁証法的範疇論への道程』(九州大学出版会：1988年) p.258 以下を引用・参照した。
- 11) これに対して、フィヒテとシェリングは $A=A$ を判断する自我(絶対我)に实在性の根拠を置く。
- 12) カントの判断表やカテゴリー表における量概念とは異なる。第三原則におけるフィヒテの量のカテゴリーは、カントの質のカテゴリーに近い。詳細は上掲、拙稿「フィヒテ『根元哲学についての我が省察』と知識学の第三原則との関係についての一考察」参照のこと。
- 13) ノヴァーリスは、たとえば「主観は客観的偶有性を持ちうるし、客観的実体も持ちうる」(FS Fr.594)と述べている。主観と客観の関係について、ノヴァーリスは主として、この記述以降論じているが、詳細をここで取り扱うことはできない。他日を期して、論じたい。
- 14) <http://jp.secondlife.com/> (日本語版サイト：2007年9月現在)
- 15) 註7を参照のこと。

Die virtuelle Welt und die Subjektivität

— Aufsatz von der Identität im frühen deutschen Idealismus —

Satoshi NAKASHIMA and Kuniaki MURASHITA*

*Department of Socio-Information, Faculty of Infomatics,
Okayama University of Science*

** Okayama University of Science, Docent
1-1 Ridaicho, Okayama, 700-0005, Japan*

(Received September 25, 2007; accepted November 2, 2007)

Fichte entwickelt von $A=A$ sein System der Philosophie. Schelling und Novalis werden durch Fichtes Philosophie(Wissenschaftslehre) beeinflusst, und machen ihren Gedanken. Die Behandlung von $A=A$, d. h., Identität, ist in jedem verschieden. Aber es ist gemeinsam, dass das Ich eine wichtige Rolle in Unterschied $A=A$ von $A=B$ hat. Besonders ist $A=B$ wichtig, wenn wir das Ich(A) als der Gegenstand(B) denken. Dieser $A=B$ drückt auch die Beziehung zwischen der wirklichen Welt und der virtuellen Welt aus. Und die Subjektivität(das Ich) ist diejenigen beide Welten. Wenn man über solche Subjektivität nachdenkt, kann das Argument auf $A=A$ oder $A=B$ im frühen deutschen Idealismus als ein wichtiges Argument betrachtet werden.